

井上光晴作品集

第一卷

勁草書房

井上光晴作品集 第一巻

昭和40年1月10日 第1刷発行

昭和49年6月10日 第8刷発行

著 者 井 上 光 晴

発 行 者 井 村 寿 二

東京都文京区後楽 2-23-15

印 刷 者 白 井 倉 之 助

東京都青梅市根ヶ布 1-385

発 行 所 東京都文京区 株式 勁 草 書 房
後楽 2-23-15 会社

落丁本・乱丁本はお取りかえいたします。 精興社印刷・和田製本
*定価は外函に表示してあります。 © Printed in Japan.

0393-881530-1836

目次

書かれざる一章	3
病める部分	23
双頭の鷺	61
重いS港	98
河	108
三号栈橋	119
長靴島	145
トロツコと海鳥	180
虚構のクレーン	225
解説	385
井上光晴	

井上光晴作品集

第一卷

コゝろの状える未明、まにれ
残った女たち、三米田の方の
坑た目あてにそう一度いっは
柳子のかばまる黒い口を
のぼりいくが、そのとき相す
命英生の面を入れた木櫃は
供糸屋と細屋との間から立見
た、動きたこ上戸と遠眼の女
利は中たちと然とあかる間の中
下路ある。井上りた晴

書かれざる一章

1

またこの地区にもおきざらした。昨日行ったG地区にも積んであった。三百冊もあるな、いや四百ぐらいあるだろう、そうするとまだ百冊しか売っていないことになる。一体どういふふうにパンフ活動の重要性を説明しようか、まったくどくどく弁解するだろう。「結局細胞が動かないから、地区でどんなに言ったって駄目なんだ」と、こんなふうに言うだろうな。でも今日はがらがらは言うまい、いくらどなったって結局ぴんとこないものはぴんとこないんだから……

鶴田和夫はそれだけのことをとっさに思いめぐらしながら、改めて二階に呼びかけた。

「誰もいないのですか……」

しばらく声がなく、それからもそと起きあがるけはいがした。彼は編上靴を脱いで二階に아가って行った。

「やあ、君は国鉄にいた中村君じゃないか、皆どうした」

まっかに充血した眼を指の先でこすりこすりびっくりした声で多少きまり悪そうにその男は答えた。

「あ、鶴田さん、こられたとですか。ええ、皆平田山に行つとるんです。どうも雲行きが悪うなつてしもうて、土壇場になつて組合の執行部が割れかけとつてですよ」

そしてわざとらしく首の根っこをびしゃびしゃ叩いてつけたした。

「どうも、ガリ版切りで昨日徹夜したもんですけん、……でも宮本君は今日帰ってきますよ、明日九時、此の間のデモのことで出頭命令がとりますから」

どうするかな、誰もいないとすると。パンフレットのこととは中村君に頼んでおこうかな、そうすれば今夜長崎までゆける、それとも宮本君を待つてまっすぐ夜行で熊本に行くか。

長崎には妻のふみ子がいた、太郎もいるのだ。もし都合よくいけたら、S市で財政点検とパンフレットの集金を半日位で片づけ、その足で長崎に直行すれば無理をせずふみ子達と半日逢うことができる。そして一番列車で熊本へ——それがこんど区地方委員会で財政点検日程がくまれた時、とっさに生れたはかない、しかし胸のうずくような希望であった。でもそれは今、駄目になろうとしている。

「中村君、今この財政は誰がやっている……」

「やっぱり宮本君がやつとるですよ」

宮本、これで決定的だ。もし他の誰かが財政責任をやっ

ているとしたら、どうせ今夜は逢えない、そうすると中村君に頼んで心おきなく長崎に行くことができる。でも宮本君は今夜帰ってくるんだ、財政責任者と逢わずにどうして点検ができれば。ふみ子、またこんどの機会に逢うさ……。

たぶん情ない表情であつたろう。なにか暖いものが鶴田和夫の險いっぱいひろがっていった。

「じゃあ、俺は宮本君が帰ってくるまで此処で待つよ」

「ええ、そがんして下さい」

「ここの最終は十一時だつたかな」

「ええ、十一時四十分ですよ、たぶん宮本君は七時半ので帰ってくると思いますよ」

そうきまると彼は急に腹がへっているのに気づいた。火鉢一つない、勿論お茶もなかった。彼は雑糞の中からコチコチになったコッペパンをだして食べはじめた。

「お湯を貰ってきましようか」

「うん、お湯があるなら」

「ちよっと待って下さい」

中村はすぐ飛び出して行った。鶴田は三分の一位になったパンの残りを食べきれずにお湯を待ったがなかなか帰ってこなかった。

「やあ待ったでしょう。ちよとどわいとらんやつたもんですから」

「有難う」

湯気のたった弁当箱の蓋が舌に焼けつくようだった。ふと彼はなんとなく気づいた。

「君は？ めしは、晩めしはどこで食べているんだ」
ちよと笑った表情をして中村は答えた。

「いいですよ、ヌキですよ」

「ヌキ？」

「ええ、でもよかとですよ、なれとるですから」

「なれているって、ここの地区では食費はでていないのか、常任費のことさ……」

答えはなかった、そしてただ彼は薄い笑いを浮かべた。

聞くだけヤボであつたかもしれない。S地区でも、昨日のG地区でもそうであつた。皆朝起きてから昼すぎまで御飯の御の字も言わぬのだ。聞くと配給が取れないという。

こんどの財政点検は特に鶴田の仕事である出版部のためにくまれ、パンフレット代金未回収の一掃に重点がおかれたものであつた。でもパンフの集金は予定の五分の一も集らず、これではどうやって次の出版を続けてゆくか、めどもつかなかった。事実この九月から印刷所には一銭も入れていない。が、それにもまして彼の心をしめつけたのは、各地区の常任達の生活ぶりであつた。彼もかつてF地区にでていたことがあり、よほどのことでもない限り驚かなかったが、今度の日程ではさすがに呆然たるものがあつた。下部は完全に壊滅しかかっているではないか。誰かは革命のある部分の当然の犠牲的風景という。それにしてはあま

りにも痛々しかった。

.....

恐らく昼めしも食ってはいまい。そして今日、特にそのことがたまらなく彼に迫ってきた。可哀想とか、革命への献身ぶりに感動する、とかの気持ではなく、そのあきらめたような中村の眼が。.....

「そりゃ、悪かったな、俺ばかり食って」

もう雑糞にはなにも残っていない。彼もコッペ一つではとても足りなかった。

「焼芋でも買ってくるか、二十円あるんだ」

「いや、よかですよ、鶴田さん。あしたの朝困りますよ」

「いいよ、買ってこいよ」

「そうですか」

半分気の抜けた返事で、それでも嬉しそうに中村は階段を降りて行った。

「安かったですよ、ほら」

中村はふうふういいながら新聞紙の包みをどさりと鶴田の前においた。

「うん、こりゃ安い。こりゃ安いよ」

「安かったですね、まけてくれたとですよ」

全く安い、大きな赤芋が六つもきていた。しばらく声もたてずに二人は食った。そしてようやく元気づいた中村が、ぼつぼつ人ごとのようにしゃべりはじめた。

「福岡のほうはどうか知りませんが、ここはひどかですよ。

第一、細胞会議が二つか三つしか持たれてなかとですよ。市委員会を開いたってほんの四人か五人しか集ってこないし、……常任は皆食うのも食わんでがらがんやっとなるとさすがねえ」

「うん、ねえ。でもめしを食われんようなやり方で、いくらがらがんやったって……」

皮肉が皮肉にならなかった。しかし、君は本当に、君の言うそのひどいということをひどいと感じているのか。ただ単に細胞会議の集りが悪い、ということがひどいというのではなく、めしも食わずに（食べられずに）がらがんやるといふ、そういう荒れはてたひどさのもう一枚内側のひどさを……。でもここでは言うまい、中村君には言うまい、なんとなくそういう気がした。

急にだまりこんでしまった鶴田を不審そうに上眼づかいにみながら中村はきょとんとしていた。

煤けたレーニンの肖像がほこりをかぶったまま危く画鋏にぶらさがっている。でもほかになにがあるというのだろ、破れた番傘が実に奇妙な広げかたで騰写版の横にたてかけてある、それだけだ。もっとも紙屑という紙屑は、ところかまわず埃をかぶって散らされている。メガホンと窓ぎわにかかった赤旗さえなければ十人が十人とも指をさしてたちどころに「木賃宿」と答えるであらう。

話のつぎはの飛んだ妙にいらいらした瞬間であった。そしていつもこのような状態の次に必ず鶴田の脳髓をとりと

めもない考えが執拗に襲ってくるのだ。彼はごろりと寝ころんだ。何も言わず中村君に悪いかな、悪いかなと思ったがだまっていた。

本当に此の頃の党はどうしたのだろう。行きづまりはどこからくるのだろう。闘争という闘争はすべて自然発生的に起こっているにすぎない。正直の所、党はそれを後からおっかけているのだ。どこに前衛？……そしてずるずると下部は壊滅していつている。

勿論、占領軍下という環境の困難さも、それをえたりとしてあらゆるデマと買弁政策をふりまく政府のためもある。或は黨員の質の問題もあるにちがいない。だが、もっと外に、何か常任一人一人、黨員一人一人の胸の底にうずくまっているもの、進りそうで進らない何かがきつとありそうな気がする。互いに互いの無氣力をそしりあうもう一つの大きな無氣力、何か党活動のしんにつかえて動かないもの。動こうとしないもの。それは何だろう、そしてそれは、俺にもあるのだ。

「ね、中村君、どうして党はこんなに行きづまってしまったのかな。どうしてこう皆、動こうとしないのだろう。君はどう思う」

あおむけになったままの姿勢で鶴田は話しかけた。ポール紙の天井が水模様になんかめくれている。

「いやあ、そう言われると困りますが、でも皆動いていますよ」

「動いているって、パンフだって大分下に埃をかぶったままじゃないか」

「それでも、仕事がいっぱいあるとですよ」

「仕事ねえ」

仕事とは何だ。何の仕事なのだ。そして皆限られた自分の仕事さえやっておればよいのか。ちょうど市役所の水道課のように、水がじゃんじゃん漏っていても、係の者がいないという理由でほっぽりだしておくのか。党も、パンフも。なぜ困難ということ、行きづまりということ、行きづまりは行きづまりでいい、なぜ真正面から皆みつめようとしなのだろう。

ふみ子に逢えなくなったことが、誰にではなくむしろに腹だたしかった。

「鶴田さん、ねむるならこれを引っかけたがよかですよ」

……中村君が毛布を着せかけている。

本当に何処に原因があるのかな、俺のこのどうにもならぬ切なさはどこからくるのかな……。

彼は腹がくちくちくだったのかうとしだした、そしてとうとうとしながらなおも結末のつかぬ考えを反芻していた。

宮本君が帰って来たら、やっぱりがんに言ってやろう。党費はどうしたんだ。たった三十％じゃないか。アカハタは、パンフレットはなぜほこりをかぶって四百冊も積んであるのか……やっぱりがんに言うより外に手はないかな。へたに同情すれば俺まで悲しくなるばかりだ。細胞をひっ

ばたけ、ひっぱたいのびてしまふ細胞なら使いものにならぬ。へたに同情するな。革命だ！ 同情するな。同情するな、彼はこの言葉がおかしくなって半分口の中でふふふと笑った。そしていつのまにか、結局は自分流儀の結論のまま、眠ってしまった。風が冷たい。何処かで救世軍の太鼓らしいものが鳴っていた。

「鶴田さん、宮本さんが帰ったですよ」

「うん、うん」

彼は半分眼をあけた。が、それははっきりした意識にはならなかった。……革命に同情なんかいらんだ。でもふみ子は可哀相だな。太郎も可哀相だ。こんど地方委員会に帰ったら必ず言ってやらなくては……下部は壊滅しかけています。パンフレットはまるで売れていません。常任はめしヌキです。……

「鶴田さん、鶴田さん」

「うん、うん」

パンフを何とか売り捌かせねばならぬ。説明つきでねばるんだ。一軒一軒、かまわずにかけこめ！ 細胞の連絡会議が必要だ、がんが言うぞ。宮本君、がんが……

「鶴田さん、鶴田さん」

議長は何と言うかな。議長！ 僕は発言します。ふみ子と逢わせて下さい。しかし福岡に帰ったら常任費はでるだろうな。二千円位でもいいがな。千五百円でもいいがな。ふみ子が可哀相だからな。……

びっしより、寝汗がでているらしいと思いながら、うっとり和中村の声を耳にしながら、それでも起きようとしなかった。だるくて起きられなかった。

2

点検報告会議はN鉄がストに入っただけ、ずっと延期された。そして延期されたまま二週間後の情勢検討会議と合併して持たれることになった。

その情勢検討会議はもうすぐ終ろうとしている。だがかんじんなどころ、本質的なところにはまだ何一つふれられていないのだ。くずれた壁をつくらってべたべた古いアカハタが貼ってある、その壁を背にぐったりもたれかかって、胸の底からぐつぐつ燃えあがってくるいたたまれぬような腹だちを抑えながら、鶴田和夫はじいっと点検報告のノートをみつめていた。

そんな愚にもつかぬこと、いや愚にはつくかもしれない、パンフレットも書籍も全力をあげて売られねばならぬ。だが、どうしたというのだ。個別訪問がいいか、街頭宣伝がいいか、そんなことをここでいくら決定しようとしたって……そういう討論が愚にもつかぬというのではない、だかもっとかんじんなこと、もっと本質的なことが……。

口先だけが空転しているようにきこえる。皆考えないのだろうが、十年一日の如き実践への決意ではなく、もっと

本當のことが、真剣な内からの叫びが。

百燭の裸電球が風もないのに揺れて、そのつどぼんやりした影が大きく川辺議長横顔に映った。議長も考えてはいないのだろうか。議長も別居している、奥さんや子供はどうして食っているのだろうか。誰も彼も一体どうして食いつないでいるのか。妻や子供に二ヵ月半一銭も送ってやらなくとも、配給が取れなくとも、病人は、薬は……

彼は今、このしんちような会議の最中に突然起ちあがって、これらのことを思いきりどなりつけたら、どんなに胸がすっきりするだろうと思った。そう思うとさっきからうっせきしていたなんともつかぬ熱い塊りが底のほうからごろごろ上ってきて、危く涙がこぼれそうにさえた。どうしてだろう。なぜ今日の会議でこのことをとりあげようとなしないのだろう。今までだって決してとりあげようとしなかった、そして決してとりあげないようにみえる。俺たちがさしあたってどうにも生活してゆけないということ、二ヵ月半一銭も、生活費を貰わないということ、そういうことを党は、今日の会議の議題としてとり扱うべきではないとでもいうのか。……パンフレットの売り方さえ問題になっていないではないか。勿論パンフの売り方の問題は大きい、それと比較してどうするというのはないが、なぜ皆そのことを言おうとしないのか。

よどみなく討論はつづけられてゆく。なにか、このせつばづまった革命のほかに、もう一つの革命があって、その

革命は何処か俺たちの知らぬ不毛の砂漠にでも爆発しているのではないか、とさえ錯覚するのだ。俺たちの苦しみと悲しみ、生活に関係のないもう一つの革命、そういう革命があるだろうか。その革命にさえ従っておれば、たとえ食わなくとも、女房に金を送らなくとも、薬がなくても、いささかの憂いも苦しみもない、そういう革命があるだろうか。

また大きく電球が揺れた。鈍い眼、頬骨のつきでた痛々しい常任たち。声だけは元気がよいが、もうしんからくたびれているのだ。俺ばかりではない、皆なにか腹の底にあるもの、胸につかえているもの、ほんものの叫び、その叫びを叫びたいような顔をしている。だが何も言わぬ、なぜ発言しないのだろうか、なぜ思いきり言いたいことを叩きつけようとなしないのか。お前だってそうじゃないか、お前だって、皆を責めるまえにお前、叫んでみろ。そのうっせきした塊りを、叫びを叫んでみろ、みろ、お前だって……。彼はぎりぎり歯をくいしばった。胸が割れるようにとんとん鳴る。だが言えぬ、だが、なぜだろう。

会議の前、鶴田は固くそのことを思いつめていた。今度こそは本當のことを言うのだ。地区の苦しみもふみ子のことも、ありのままにさらけだそう。どこの細胞でも壊滅しかかっているということ、ほとんどの地区の常任が正常の感覚を失いかけているということ、ブルジョア的な感覚ではない、いいかえればルンペン化していること、化しつ

あること、そして最後に給料の問題。

二ヵ月半、一銭も常任費はでない。地区のめしヌキの問題と関連して、今日こそは必ず……だが、きつと常任費のことだけでも誰か言い出すにちがいない、もし誰も発言しないとすれば、その時こそ、必ず俺は発言せねばならぬ……と。

だがどうしたというのだ、今となつては何も言えぬ。増山さんも、森も、三田も、鍋島さんも、村瀬も、なぜ言わないのだろう。鶴田はひとりひとりの顔を穴のあくほどみまわした、そして彼の視線をうけるとあわてて常任たちは次々に瞳をふせるのであった。皆やはり、考えている、考へてはいるのに。誰かが咳をした。その咳が白々しく流れた。

「では、結論として……」

びっくりするほどの明るい透きとおった議長の声が切迫した空気をたちわるように響いた、窓硝子がびりびりふるえる。

「では、結論として……」

ふたたび議長が、こんどは低く繰返した。今だ。この結論のまえに、誰も言わぬのか。今がチャンスだぞ、今が、早く、今言わなければ、……お前言え、お前、俺は駄目だ、早く……。

かっかっ顔が燃えるようであった。顔が燃えた。そしてついに……

会議は終わった。そしてついにそのことにはひとこともふれられず、語られないまま、皆何か言い残したような面もちで、夫々席をはずした。いくら深刻そうな、言い残した顔をしてみても駄目だぞ、もう駄目だ、なぜそんならさつき発言せぬ。

五時間、ぶっ通しの討論。討論している間はまだよかった。何か体をささえているはりがあふれているのだが、ようやく終つてしまうと、さすがにしばらくは起ちあがれないほどぐったり疲れていた。もう四年ごし、彼の左の肺はいつも音をたてていた。それがこの頃めつきりひどくなつていくのがめにみえてわかるのだ。彼は、しばらく畳にうつぶせになって、肩で激しく呼吸しながら、繰返し、さっきのことを思いつめていた。

また次の機会まであと二週間もある。煙草のない二週間、煙草はまだいい、だが……どうなるというのだ。

笑われてもいい、怒鳴られてもいい。何べん言つてもぐちにしかならぬが、彼はいろいろのことを発言しなかったのだ。自分の仕事ではないという、ただそれだけの理由でうやむやにされているパンフレットの山。みずみずしさということをまるで失った上目使いの力のない眼について。終戦直後のあの滴る鮮血の魅力はどこにいったのだ。だが、とりわけ給料のことは、なんとか具体策を決定してもらいたかった。それも今日、明日にぜひ千円欲しいのだ。

長崎の実家に帰してあるふみ子から便りがきていた。

「……ただ食べるだけはなんとか食べさせてもらっています、やはり、自分の奥さんの米代位鶴田さんもねえ、などと義姉さんたちからことごとに言われますので、それに太郎からお菓子をおねだられる時が一番つらい……」

と、あっさりした書きだしであった。

思えばふみ子を家に帰してからこちら、まだ一銭も送っていないかった。第一送りようがなかったのだ。

先々月、一番暑いさかりに、たった一枚残った羽織と、金になりそうな最後の『魯迅全集』を前にして鶴田はふみに言った。

「もう仕方がない。このまえお前が言っていた通り、太郎を連れて長崎に帰るか」

だるそうに太郎を抱えて、それでもきちんと坐りなおして、ふみ子は答えた。

「ええ、妻の会だってもうあてにはならないし、それに……でも明日、病院の結果が分るから、ひよっとすると……」

ちよっと言葉を切って、太郎をあやすようにふふと笑った。

「ひよっとすると、なんでもない栄養失調ぐらいかもしれないし、……休さえよかったら、まだなんとかなるから……」

それから思いだしたように、

「妻の会もねえ、皆さん、同じように困っていらっしゃるから」と、ぼそぼそと口の中でつぶやくようにつけたした。

いつも疲れる、疲れると口ぐせのように言っていたふみ子が此頃めだって顔いろが弱々しくなり、アパートの階段を上るのさえ、はあはあ重い息を吐くようになったので、たつて鶴田はふみに診断をうけるように（友達の家族保険を借りてきて）すすめたのであった。そのレントゲンの結果が明日はつきりするのだ。血沈はすでに十八ミリもあって危ぶまれていたが、それだけではまだ医者はなんとも診断を下そうとせず、ともかく明日、何もかも決定する筈になっていた。

翌日、地方委員会事務所の細胞会議があつて、いつもよりおそく彼はアパートに帰った。結果が気にかかつて急いで階段を上ろうとすると、後から、わっ、とふみ子が声をかけた。

「あつ、びっくりするじゃないか、で、どうだった」

彼がせきこんで尋ねるのに、彼女は、ただ黙って首を横にふった。

駄目だ。やっぱりやられていたのか。

鶴田はそのまま、ふみ子より先に、とんとんと自分の部屋に上っていった。いっぺんに力が抜けたような、それでいて緊迫感のない落ちついた気持であった。とうとう来るものが来た、どん底、どん底、どん底、……彼はもう何も

考えたくなかった。

左肺浸潤、一年間絶対安静。

ともかくもふみ子の体に故障さえなければ、まだなんとかやってゆけるめどはあった。配給物は取れなくても、数十日、一銭も彼が持ってこなくても、体さえ丈夫なら、まだどうにか編物をしてでも晩のバン代位はかせげる。

R新聞社を譲になりF地区からK地方委員会にできるようになってから丸二年、売って売って、売りつくしてよく持ちこたえてきた。彼の体をもっとも要求する配給のバターを米と交換してまで、どうにか切り抜けて来た。家の中のものを全部売りつくすと、今度は共同組合のものを委託してもらって売った。はじめホームスパンを売り、ホームスパンが売れなくなると靴下を売り、八冊百円の大学ノートを売り、そして《下山、三鷹事件の真相》を売った。ただふみ子の体だけで今日まで持ちこたえてきたのだ。

最後の抵抗線。それが今、もうくも潰えさってしまおうとしている。もう仕方がない。「どうにかめはながつくまで別居、ふみ子と太郎は彼女の実家に帰る。金が出来次第一銭でも送ること」そうするより外に何の方法があったらう。

「ほらほら、太郎、お父ちゃんとさよならするんですよ」
今にもあふれそうな涙に耐えながら、そっぽをむいてふみ子は彼に別れをつげた。窓からのけぞるようになして太郎

が、珍しそくに彼のほったをつねった。汽車は音もなくで行った。

いつまでもホームのはずれに帽子を振っている彼の足もとに、焼けただれた夕陽がうずくまるような影を落していた。

便りはつづいている。

「あなたのお体のことを何時も心配しています。配給のバター類はできるだけ取って下さい。でもできそうもないこんなことを、言うだけ悲しくなりますね。

太郎だけが気がねなく元気で飛びまわっています。やっぱり淋しいのか、お父ちゃん、お父ちゃんは、と首をくりくりさせて尋ねたりします。

では又。ソヴエトが原子爆弾をつくったので、またぞろ家の中は共産党と戦争の話でもちきり。でもまあほどひどい悪口は言わなくなりました。

私がだまっていられみつけてやるから。

私の体は一進一退、でも前よりはいくらか良いように感じます。呉々も御無理なさらないように。さようなら

ふみ子

追伸

父がまた、あなたに手紙を書いているようです。でもなにごともお氣にかけれぬよう」

「自分の奥さんの米代だけでもねえ、鶴田さんも」この言

葉がなによりも彼の胸につきささった。舅父おふちからの封書もふみ子の便りと前後して届いていた。それは例によって激しく何らかの決着を迫ったものであった。

「扶養能力のない男に娘をこのまま、ずるずるまかせておくことはできぬ。……」

「こちらに来てから二ヵ月間、まだ一銭の療養費さえ送ってきていない。……(金のことだけを言うのではないが)……」

「あなたはなんでも革命とやらのためにとおっしゃるが、その革命は何時おこるのか。分りもしない革命のために娘をだまっ、あずかっておれとでもおっしゃるのか。……」

「それに、まだ私は共産党がいいものか、悪いのか、それすらなっとくできない。……」

舅からの手紙はそれなりに一々もつともであった。だが誰が好んで妻や子供達と別れよう。結論としてふみ子をふたび引きとるか、或は充分療養する金を送るか、どれもできないのだ。送る金は勿論びた錢一文でもできっこないし、ふみ子達を引きとることは全くそれは一家全滅を意味する。しかもいまさら革命がどういふものであるかを舅になっとくさせようとする努力は、むしろ逆効果にしかならぬ。

彼はもう妻や子供と一緒にみちたりた生活を営むということより、なんとかして別々でもいい、その日まで、革命かくの片でもみるまで、石に齧りついても生きのびたいと思っ

ていた。その最低の願いの、別々にくらすということからさえ、すでに追いやられようとしているのだ。

3

いつものことだが、鶴田和夫はさっきから背中が押さえつけるように鈍く痛んで、時々吐きそうな気分におそわれはじめた。

九月分の残りが千円はあるだろう。千円あれば当分ふみ子の注射代位にはなる、千円送れば、或は舅だって、ほろりとして考えをゆるめてくれるかもしれない。こう考えと、彼はむしろ千円欲しくなった。今からでもいい、俺ひとり、財政部にかけあってみるか。……

だが、かけあってみたって、それでどうなるというのだろう。

彼はさっきの会議でついにそれ以上報告しえなかった、自分の点検ノートをばらばらと指ではじいた。

「K地区は常任七人、一ヵ月三千五百円の食費代で、正にルンペン的な生活をしている。彼等は自分の今晩食べるめにだけ眼をぎらぎらさせているだけで……」

勿論、これは逆にも言える。そういうルンペン的な無気力こそが一ヵ月七人で三千五百円の食費であまんでいるのだ、と。だがとにかく三千五百円で七人生活していることは目前の事実である。一体一人いくらにつくというのか。俺ばかりではない、皆困りすぎるほど困っているのだ。

俺はまだ一ヵ月完全に党の食堂で食うだけは食っているのだから。……

ちょうど財政部の前島が通りかかった。彼はかけようとした声をぐくりと飲みこんだ。そのひょうしに椅子がばたんと後にたおれた。

だが、それにしても千円はどうしても必要だ、思いきって言ってみるか。「妻が病氣していますので……」と。でもK地区が、しかしK地区やG地区の同志達が苦しんでいることが、俺たちの二ヵ月半の生活費を貰わない苦しみと帳消しにはなるまい。そうだ、もういっぺん財政部に請求してみよう。しかし……矛盾した感情であった。

彼はゆるゆると起ち上り、そしてふたたび腰をおろした。俺は階級的にものを考えているか、考えている。階級的であってもなくても、現実には千円の金はあるのだ。

菓子ねだっている太郎の顔が、大きく泣きはらした臉をしてうかび、それは財政部の真正面に貼られてある、各県パンフレット回収率のグラフとモニタージュしてひらひらした。

「じゃ、おさきに」

「あ」

「鶴田、帰らないか」

「うん、ちょっと、もうすぐ終るから」

「まだ、めしできていないかもしれないぞ」

労組部の戸木田がアカハタの机に半分腰をかけて、パンフレットのゲラに朱を入れる鶴田ののめとをみながら誰にもなく言った。

「できていますよ、戸木田さん。僕はさっき食ってきまして」

若いオルグの原が、まだ食いたらないような声で、とんきように答えた。

「あっそうか」

それで皆、どやどやとでかけていった。常任たちは皆、裏の共同炊事場で一緒に食べているのであった。

もう、さっきの一瞬切迫した空気はみごとに消えさって、がらんとした事務所に、ただ受付の電話だけが、つき破るように冷たく鳴り響き、そしてすぐそれは止まった。彼はペンをおいた。

ひえびえとした風がめくるように人のいない机の上を流れてゆく。もう考えることをやめよう、考えたってどうにもできるといふわけではないと、強いて自分に言いかけた。だが、考えないわけにはいかないのだ。一体どうなるだろう、彼は机の上をきちんと片づけはじめた。このパンフレットだって、印刷費をどう算段するのだろう。もう前のが大分たまっているのに。

福岡県の政治新聞のレポ綴じの中からぼろりと切り抜きが二、三枚落ちた。四つ足をがんにがらめにしばられて、ひっくりかえった牛を前に、裁判官の服装をした狼が舌な